

山梨県南都留郡山中湖村山中地区の 集落構造に関する考察 —たて道の変容に着目して—

小粥慶子¹・福島秀哉²・中井祐³

¹非会員 東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻

(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:okai@keikan.t.u-tokyo.ac.jp)

²正会員 修士(工) 東京大学大学院助教 工学系研究科社会基盤学専攻

(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:fukushima@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

³正会員 博士(工) 東京大学大学院教授 工学系研究科社会基盤学専攻

(〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1, E-mail:yu@civil.t.u-tokyo.ac.jp)

山梨県南都留郡山中湖村の山中地区は、元々の集落の中心である旧鎌倉往還と、昭和30年代に舗装された湖畔道の2本の主要道、およびこれらを結ぶ「たて道」と呼ばれる十数本の細街路によるはしご状の街路網が特徴的な集落である。本研究は、生活道路として使われるたて道に着目し、その成り立ちや利用の変化に関する分析を通して、山中地区の集落構造の変容過程と、自然条件、集落の社会構造、生業の変化等との関係について考察したものである。

キーワード: 山中湖村, 集落構造, たて道, 雪代, イッケ

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

山中湖村山中地区の集落の起りである地区主要部は、元々の集落の中心である旧鎌倉往還と、昭和30年代に舗装が進んだ国道138号(以下、湖畔道)の2本の主要道の間を、地域住民が“たて道”と呼ぶ幅員2~3m程度の10数本の村道指定されている細街路(以下:たて道)が結ぶ、特徴的な集落構造を有している。

現在山中湖村では、たて道の段階的な景観整備を含めた、地域の歴史や空間的特徴を活かした空間整備と、住民主体のまちづくりの一体的な推進に取り組んでいる。

このたて道のような、集落の細街路や庭といった生活空間には、自然地理条件や社会構造の特性による集落の変容過程や、その上に営まれてきた生業や生活など地域の歴史の痕跡が見られると考えられる。実際に、たて道沿いの空間は、物置や畑などの沿道住民の利用や、小学生の遊ぶ姿が見られる一方、地域特有の災害である雪代がたて道を流れたという記録や言い伝えが残り、また屋敷神や昔の生業の跡が残るなど、たて道自体を集落の歴史を伝える地域資源として捉えることもでき、空間としても多様な様相を見せている(写真-1, 2 参照)。

山中湖に関する既往研究は、山中湖村の観光地化の過程を記述した山村¹⁾らの研究をはじめ、山中湖の湖畔景観に着目した高橋²⁾らの研究がある。山中地区を対象とした山崎³⁾の研究において、たて道は江戸時代以前から主要道路であった鎌倉往還沿いの家々と湖をつなぐ生活道として使われたが、昭和30年代に湖畔道路が整備されたのをきっかけに、住民が生活の場を鎌倉往還に残し、湖畔道路沿いに観光客向けの店舗を持つようになると、たて道の機能が生活と生業の場をつなぐ道へと変化したことを指摘している。しかし、各たて道を観察すると、地区南北でたて道沿いの区画の形態が異なることや、沿道空間を構成する要素が道によって異なることに気付くが、このような空間の構成要素の詳細な差を踏まえた分析には至っていない。



写真-1 村道山中44号



写真-2 村道山中25号

そこで、本研究の目的は、たて道の成り立ちや利用の変化について分析を行い、各たて道の空間の多様性の要因を明らかにすること、およびそれを通して、山中地区の集落構造の変容過程と、自然条件、集落の社会構造、生業の変化等との関係について考察を試みることにし、たて道から見た集落の特徴を明らかにすることとする。

(2) 手法

集落構造の分析については、地図資料に加え個人が所蔵していた資料を用いた（図-1参照）。また自然条件、集落の社会構造、生業の変化等の分析については、村史をはじめとする文献資料^{4, 5, 6)}、行政資料を用い、補足的にヒアリング調査を行なった。用いた資料およびヒアリング対象の一覧を表-1および表-2に示す。

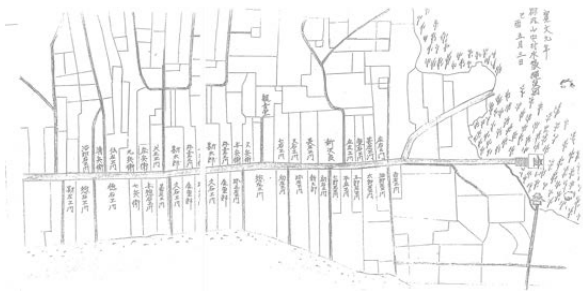


図-1 寛文九年郡内山中村水帳縄受図⁷⁾
(作成年不明・高村不二義氏所蔵)

2. 対象地の概要

(1) 山中地区の概要

山中湖村は、富士山北西部に位置し、山中・平野・長池、旭日丘の4地区からなる、人口5872人面積53km²の村である⁸⁾（図-2参照）。山中地区は、山中湖の西岸に位置する地区である。山中地区は現在12の組によって構成されており、それぞれの組はさらに細かい単位である隣保組にわかれている⁹⁾（図-3参照）。

山中地区の集落の起こりである旧集落範囲は、元々の集落の中心である鎌倉往還と、昭和初期から整備が進んだ国道138号（以下、湖畔道）の2本の主要道の間を、地域住民が“たて道”と呼ぶ幅員2～3m程度の10数本の細街路が結ぶ特徴的な集落構造をしている（図-4参照）。

文献資料や地区住民へのヒアリング結果から、たて道の厳密な定義は存在しないが、鎌倉往還から湖に伸びる複数の道のうち、本研究では村道に指定されている最北の諏訪通りから、最南のたて道25号までの11本を研究対象とし、詳細な分析は旧集落範囲の村道44号から25号までの9本を対象として調査を行った。

表-1 主な文献資料

分類	資料名	発行年	著者・発行元
地図資料	2.5万分の1地形図	1896年、1913年、1922年、1929年、1954年、1971年、2008年	国土地理院
	住宅地図	1979年、1985年、1986年、1988年、1990年、1991年、1992年、1994年、1996年、2001年、2006年、2011年	ゼンリン
	治水地形分類図	1976年～1978年	国土地理院
航空写真	国土地理院航空写真	1947年、1949年、1951年、1959年、1962年、1970年、1975年、1987年、2001年、2007年	国土地理院
	山中湖村史第1～5巻		山中湖村
文献資料	山中村の歴史	1996年	山中村の歴史編集委員会
	土地登記簿	2014年	
行政資料	集成図	2014年	
	(災害復旧関係)昭和26年雪しろ災害長池地区公園	1984年 1894年、1923年	
住民所蔵資料	戸主表	資料作成年は不明	高村不二義氏作成・所蔵 寛文9年～昭和51年
	寛文九年郡内山中村水帳縄受図	資料作成年は不明	高村不二義氏所蔵
	集成図	1850年～1877年	大森敬郎氏所蔵
	高村五兵衛門関係文書	1868年	高村正勝所蔵
	中野村山中全図	1915年	
	中野村土地宝典	1962年	
参考資料	山中湖村の自然誌	2006年	山中湖村
	郡内今昔写真帖	2008年	高田彰
	郡内の100年	1993年	後藤義隆

表-2 ヒアリング対象住民一覧

年	日程	No.	時間	場所	人	年齢	主なヒアリング内容
平成26(2014)年	10月19日	1	11:00-12:30	事務所	A氏	70代	たて道25号
		2	13:00-15:00	飲食店	B氏	70代	たて道44号通学路
	11月14日	3	15:00-15:50	ご自宅	C氏	50代	たて道25号
		4	16:00-17:50	事務所	D氏	60代	明神通り、米軍駐留
					E氏	60代	
					F氏	60代	
	11月15日	5	13:30-15:00	事務所	G氏	70代	たて道42号雪代
		6	16:00-18:00	自宅	H氏	90代	たて道42号
		7	18:30-22:00	自宅	I氏	70代	山中地区の歴史
	11月16日	8	16:00-18:00	事務所	J氏	80代	たて道42号
		9	11:00-13:00	自宅	B氏	70代	雪代と山中集落
	11月18日	10	14:00-15:30	事務所	A氏	70代	たて道25号
		11	16:00-17:50	自宅	K氏	70代	たて道39号
	11月19日	12	11:00-13:00	事務所	J氏	80代	たて道40・41・42号
		13	14:00-15:00	飲食店	L氏	70代	たて道39号
		14	15:30-16:30	自宅	M氏	80代	明神通り、山中三軒屋
		15	17:00-18:00	飲食店	N氏	60代	たて道18号
平成27(2015)年	12月26日	16	14:00-16:00	事務所	O氏	90代	雪代
		17	10:00-11:00	自宅	B氏	70代	たて道44号
					K氏	70代	たて道39号
					A氏	70代	たて道25号ケヤキ
					N氏	60代	たて道18号
	1月28日	20	15:00-16:00	飲食店	N氏	60代	たて道18号
		21	16:00-17:00	事務所	J氏	80代	たて道42号
		22	13:00-14:00	神社	P氏	70代	本家・分家
		23	15:00-18:00	自宅	Q氏	60代	本家・分家
	5月31日	24	10:00-12:00	自宅	B氏	70代	A家イッケ
		25	15:00-17:00	自宅	R氏	90代	C家イッケ
	7月5日	26	13:00-14:00	自宅	S氏	80代	長池地区イッケ
		27	14:00-15:00	飲食店	N氏	60代	D家イッケ
		28	15:00-17:00	親戚宅	T氏	60代	A家イッケ
		29	17:00-18:30	自宅	U氏	30代	B家イッケ
	7月21日	30	13:00-15:00	神社	P氏	70代	C家イッケ
		31	15:30-17:30	食堂	V氏	40代	E家イッケ

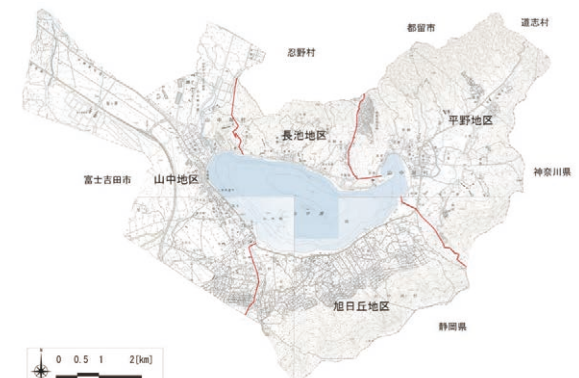


図-2 山中湖地図（国土地理院地図をもとに筆者作成）

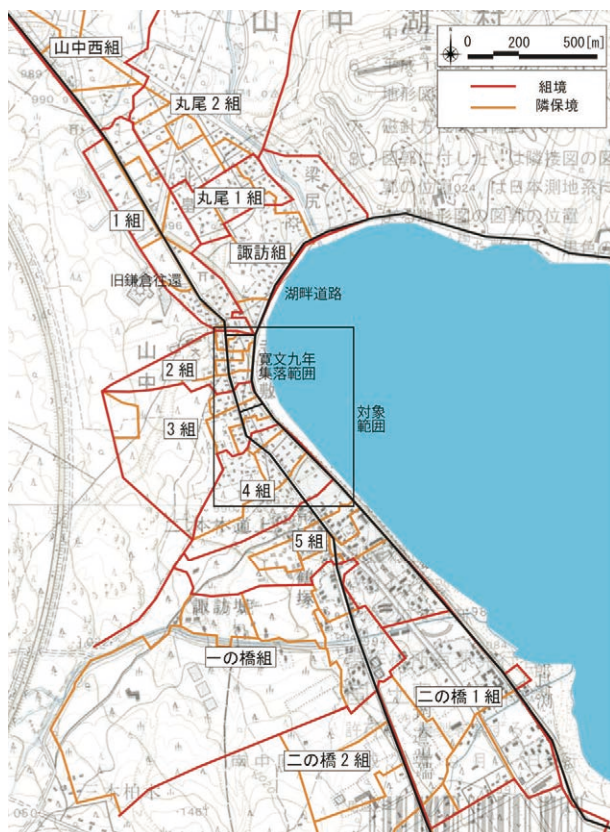


図-3 山中地区の主要部と道路（2008年地形図に筆者加筆）



図-4 旧集落範囲拡大図とたて道の位置
(2011年ゼンリン地図を元に筆者作成)

3. たて道の空間変容

ヒアリング調査で得た情報をを中心に整理し、昭和初期から現在までの沿道も含めた各たて道の空間変容を図-5から図-13に整理した。また、各たて道の変容過程と特徴、および整備に関する情報を表-3に整理した。

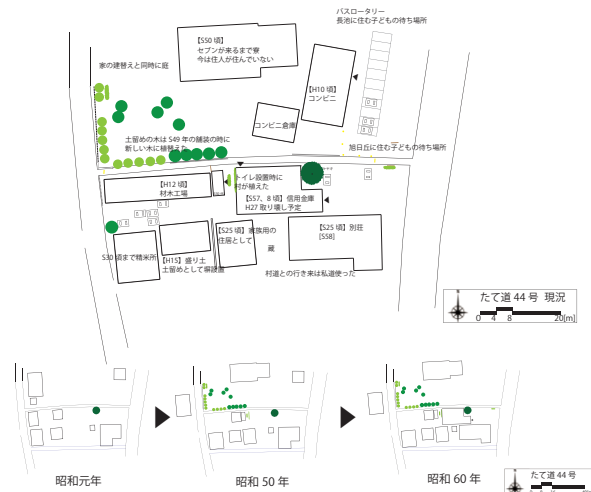


図-5 たて道村道山中44号の空間変容

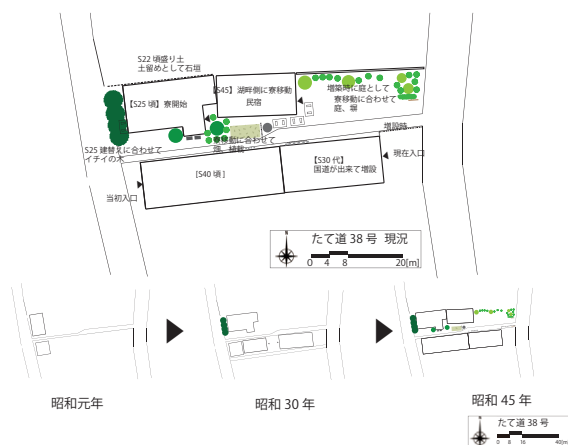


図-6 たて道村道山中38号の空間変容

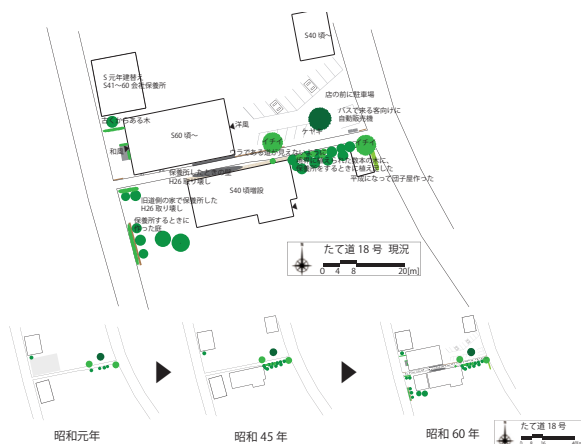


図-7 たて道村道山中18号の空間変容

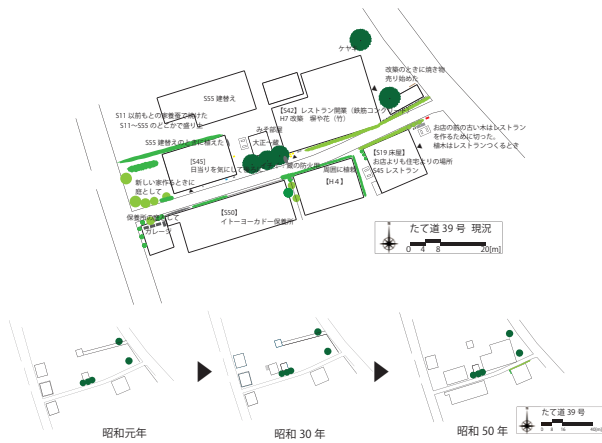


図-8 たて道村道山中39号の空間変容

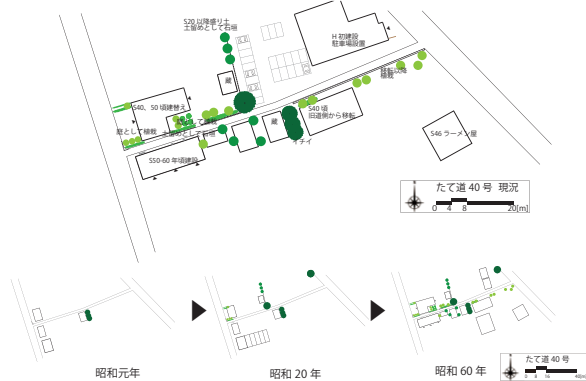


図-9 たて道村道山中40号の空間変容

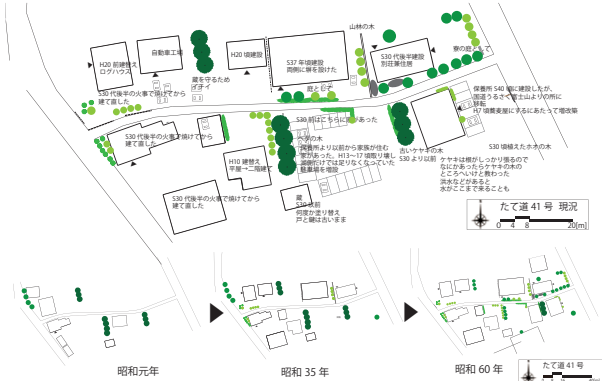


図-10 たて道村道山中41号の空間変容

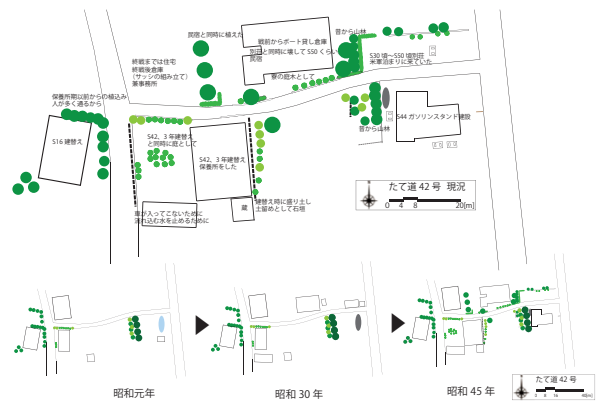


図-11 たて道村道山中42号の空間変容

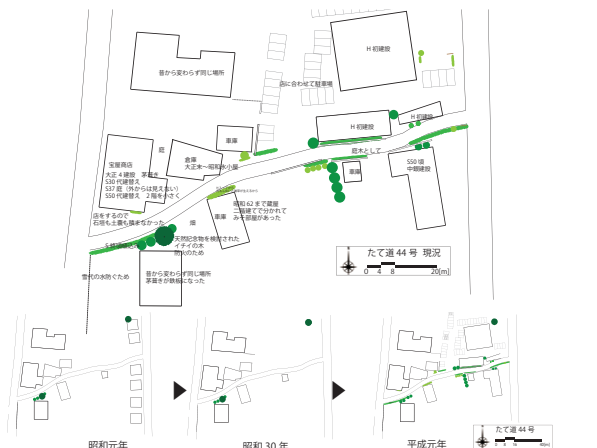


図-12 たて道村道山中43号の空間変容

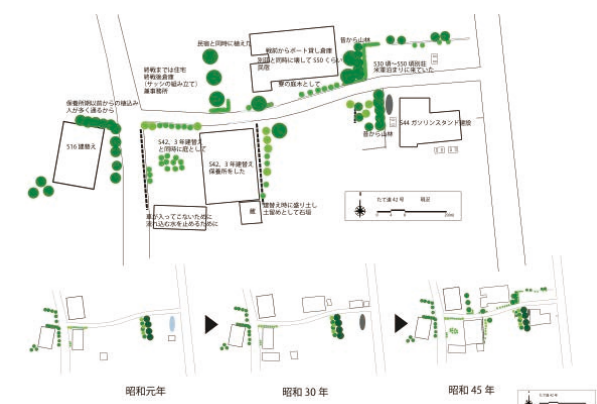


図-13 たて道村道山中42号の空間変容

表-3 たて道の変容過程と特徴の整理

		村道山中37号	村道山中44号	村道山中38号	村道山中18号	村道山中39号	村道山中40号	村道山中41号	村道山中42号	村道山中43号	村道山中25号
位置	小字	北畠	寺屋敷	寺屋敷	寺屋敷/築地鼻	築地鼻	築地鼻	築地鼻	築地鼻/二本木道下	二本木道下	二本木道下
	組	山中1組	山中2組	山中2組	山中3組	山中3組	山中3組	山中4組	山中4組	山中4組	山中5組
自然条件	隣保組との関係	隣保組内	隣保組内	隣保組の境界	隣保組内	隣保組内	隣保組内	隣保組の境界	隣保組内	隣保組の境界	隣保組内
	雪代災害の有無	雪代記録有	確認できず	確認できず	確認できず	確認できず	確認できず	確認できず	雪代記録有	雪代記録有	雪代記録有
村道認定 ／整備年代	村道認定	大正9年	昭和43年	大正9年	昭和43年	昭和43年	昭和43年	昭和43年	昭和43年	昭和43年	大正9年
	拡幅整備	昭和40年	昭和49年	昭和50年	不明	昭和45年	不明	昭和45年	昭和45年	昭和45年	昭和49年
歴史を伝える 建築の有無	歴史を伝える 建築の有無	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ	ケヤキ
沿道の住民が 所属するイッ ツケの変遷	寛文9年	A家/B家/不明	C家/不明	D家/E家	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
	江戸末期	A家/B家/C家	A家/不明	不明	D家/E家	不明/A家	A家/C家	A家/C家/不明	A家	A家(C家)	D家/不明
	現在	A家/B家/C家	A家/C家	A家/B家	D家/E家	A家/B家/C家	C家	A家/B家/C家	A家	A家(C家)	D家/E家
沿道住民の生 業の変化とた て道の利用	米軍向け商売 (戦後から昭和31 年まで)	不明	不明	商賈商	有(内容不明)	風呂屋/床屋	不明	食品店	宿	商店	不明
	保養所の経営 (昭和31年～ 昭和50年代)	不明	保養所経営	保養所経営	無	保養所経営	無	保養所経営	保養所経営	無	保養所経営
	現在の湖畔側 沿道利用と その資本形態	住居	コンビニ(住民) 銀行(外部資本)	土産物屋(住民) 民宿(住民)	レストラン(住民) 団子屋(住民)	レストラン(住民) レストラン(住民)	洋服店 (外部資本)	蕎麦屋(住民)	ガソリンスタンド (住民)	ゲームセンター(外部資本) レストラン(外部資本) 銀行(外部資本)	民宿(住民)

4. たて道からみた山中地区の集落構造の変容

各たて道の空間変容に関する分析、および集落構造の変容過程とその要因について述べる。

(1) 集落のはじまりと雪代

雪代とは、富士山の融雪水が凍土の上を流れ、土石流として集落を襲う富士山麓地域特有の災害である。記録に残るだけでも山中地区において度々雪代の被害があったことが分かっており、実際に災害を体験し記憶している住民もいる¹⁰⁾。昭和26年の雪代災害（写真-3参照）後の水路等の整備以降、山中地区の雪代被害は無い¹¹⁾。

寛文九年水帳縄受図が示す旧集落範囲は、雪代災害を避ける位置であったと言われているが、それを示す文献資料は見当たらない。現在の地形図で確認すると、確かに背後が微高地となっており、雪代が逸れていた可能性は高い。また、集落拡大に伴って屋敷が建てられた旧集落範囲の外では、雪代対策のため屋敷周りに石垣を整備したという話や、たて道が雪代を湖へ流す空間として機能したという記録や証言が得られたことから¹²⁾、旧集落範囲は雪代被害を避けるように選定された可能性は否定できない。

(2) 集落の拡大過程と社会構造

a) たて道沿いの区画の特徴

たて道沿いの区画を見ると、旧集落範囲である村道18号以北では、鎌倉往還から湖畔までを一軒の家が所有する細長い区画となっているのに対し、村道39号以南は鎌倉往還から湖畔の間までの区画が複数の家によって分割されていることが分かる（図-4参照）。そこで、集落の拡大過程に着目し、沿道の区割の差の要因に関する分析を行った。



写真-3 昭和26年の雪代災害（村道37号）（山中湖村提供）

表-4 組の増加と集落の拡大

	組数	名称	戸数	背景
寛文9(1669)	3組	下宿・中宿・二本木	38戸	雪代
1800年代前半			80戸程度	
明治元(1872)	5組	1～5	69戸	
大正6(1917)			124戸	
戦後	7組	諏訪、二ノ橋		米軍駐留、湖畔道開通 丸尾開発
昭和26(1951)				雪代→水路整備
昭和47(1972)			500戸程度	
昭和53(1978)	8組	丸尾		
平成5(1993)	11組	丸尾2、二ノ橋2、一ノ橋		
平成23(2011)	12組	山中西組		
平成25(2013)			600戸程度	

b) 集落の拡大過程と組の増加

山中地区は現在12個の組によって構成されている¹³⁾。山中地区の組の分け方は、血縁ではなく地理的要因によって決められている¹⁴⁾。寛文9(1669)年の旧集落範囲は江戸期には「下宿・中宿・二本木」と呼ばれる3組によって構成され、これは現在の2組、3組に相当する。その後、分家として同族内から独立させる際の土地の分与である「分地」、または「売買」「賃入」と呼ばれる土地の売買によって¹⁵⁾、南北に広がるかたちで山中集落が拡大した。戦後の人口増加に伴いさらに1組の北側に諏訪組、5組の南側に二ノ橋組ができ、その後も南北への集落が拡大に伴い組が増加した（表-4参照）。

c) 集落の拡大過程とイッケによる分地

上記の分地による集落範囲の拡大過程を分析するため、山中地区の同族集団であるイッケについて調査を行った。イッケとは、山中湖村における同族の呼称であり、「本家・分家の系譜関係によって構成される家々の連合」を指す。同じ本家から分家した家々は同じイッケに属する。現在の山中集落には14のイッケがある¹⁶⁾。

そこで、まず現在の土地所有者の所属するイッケについてヒアリング調査を行った。山中地区の高村不二義氏作成の寛文9(1669)年～昭和51(1976)年の分家の過程を示した戸主表、寛文9(1669)年の区画と土地所有者を示した寛文九年郡内山中村水帳縄受図、同じく、江戸末期～明治初期の区画と土地所有者を示した集成図を用いて、寛文9(1669)年、江戸時代末期～明治初期（嘉永3年～明治5年の間）における各土地所有者のイッケの分布状況の復元を試みた。（図-14、図-15参照）

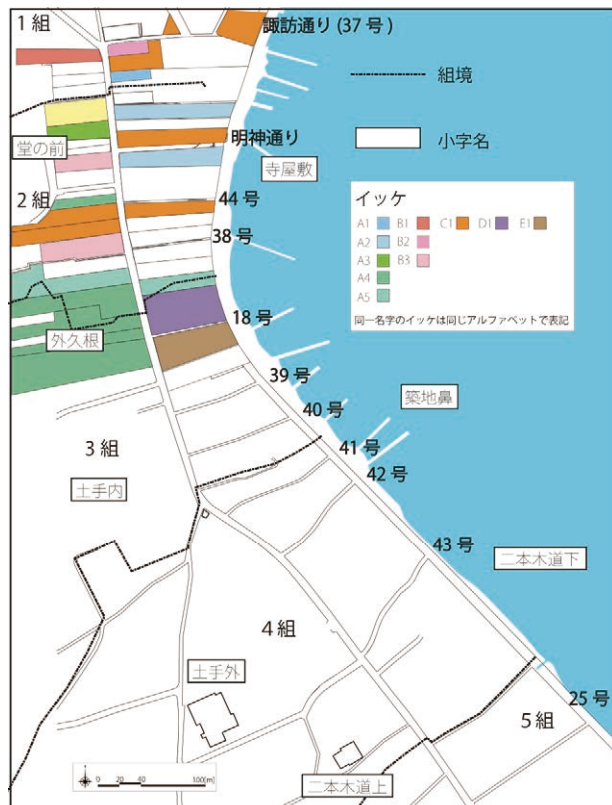


図-14 寛文9(1669)年の各イッケの土地所有状況
(筆者作成)



図-15 嘉永3(1850)-明治5(1877)頃の各イッケの土地所有状況
(筆者作成)

明快な集落の拡大過程を示すことは難しいが、たて道41号以南に着目すると、たて道沿いに同じイッケや同じ名字のイッケ同士の土地がまとまっていることが分かる。寛文9(1669)年の旧集落範囲内では、各家が鎌倉往還から湖までの土地を一続きに持ったが、それ以降の集落の拡大過程では、本家が田畑などに利用していた南側のまとまった土地を分割し、「分地」により分家に与えたことが、現在のたて道沿いの区画形状の違いとして現れていると考えられる。

d) 戦後の土地所有者の変化

その後、集落の南側の地域では、昭和初期の山中湖畔の観光開発を受け、村外の富裕層が別荘地の名目で湖畔沿いの土地を購入するケースが見られた。しかし、多くは実際には別荘を建てずに、山中地区住民に畑として貸していた。それが、昭和22(1947)年の農地法により、この土地がそこで農業に従事していた住民のものとなり、これまでこの地域に土地を集落に土地を持っていなかった住民が湖畔側の土地を持つようになった¹⁷⁾。このうち、借地に家を持っていた住民などは、この湖畔沿いの土地に住居を構え始め、さらに集落南側の湖畔沿いに住居が並ぶようになり、集落の拡大につながった。このようにして村道42号以南の湖畔沿いに新たに住み始めた住民にとっても、先述の分地による集落の拡大時と同様、たて道は鎌倉往還から住居に繋がる生活道として共同で使われる道であったと考えられる。

(3) 生業の変化とたて道の利用形態の変化

この集落の社会構造や社会状況との関係において、集落の拡大過程で生じた沿道の区画形状および土地所有の特徴は、その後たて道が私道のように使われるか、区割りの関係で複数の家で共用されるかといった、利用者の特性や利用形態の違いはもちろん、戦後の生業の変化や、集落の観光地化を通じた各たて道の利用、およびその蓄積としての空間の多様性を生む一要因となったと考えられる。次に、この沿道の区画形状および土地所有の差に着目しながら、山中集落が観光地化を遂げる戦後から現代までの生業の変化と、各たて道の利用について述べていく。

a) 農道としての利用（江戸期から戦前）

山中地区は火山灰質な土壌条件により農業生産性が低く、江戸期から大正まで、荷物を馬の背に乗せて運ぶ駄賃稼ごか、馬を使って山から薪や桑を運ぶ山稼ご、養蚕、農業などが主な生業であった。大正14年に始まるトラックによる駄賃付けが昭和初期に本格化したことにより、養蚕や農業が主な生業となった。人々は農業や日常生活の中で湖と家の行き来をするのにたて道を使った¹⁸⁾ (写真-4参照)。

b) 米軍向けの生業の展開（戦後から昭和30年）

第二次世界大戦後米軍が梨が原に駐留すると、鎌倉往還沿いでビアホールやパチンコなど米軍相手の商売を行うようになった（写真-5、図-16参照）。たて道沿いにも風呂屋や床屋など米軍相手の店舗が並び、英語看板が設置された（写真-6参照）。

c) 保養所経営の展開（昭和30年代以降）

昭和31年に米軍が撤退すると、昭和30年代後半より企業に対する保養所を営む家が増加した¹⁹⁾。これにより、たて道のような集落の細街路まで外来者の進入が本格化し、沿道にも庭や壁といった外部者の目を配慮したしつらえが増加し、畑でつながっていた家々が、これらの構造物によって隔てられるようになった（図-17参照）。

d) ドライブイン店舗の展開（昭和30年代以降）

昭和30年代に米軍の重機を用いて湖畔道路が整備されると²⁰⁾，湖畔側からの観光客が増加し，たて道42号以北の全てのたて道沿いにおいて住民は家を鎌倉往還沿いに残して湖畔側に店舗を持った（図-18参照）。

なお，この時期以降の外部資本の流入を見ると，集落の拡大において比較的新しい地域である，たて道42号以南の湖畔沿いの土地については，土地の貸借や売買，放棄が，旧集落範囲の北側の地域に比べて多いが，集落構造の変容過程との明快な関係性は見出せなかった。



写真-4 農道として利用されていたたて道（現村道 42 号）



写真-5 山中集落と米軍兵（大森敏郎氏提供 年代不詳）



写真-6 たて道 39 号の風呂屋（大森敏郎氏提供 年代不詳）



図-16 米軍向けの店舗立地（ヒアリングにより作成）



図-17 保養所の位置（1992 年時点、筆者作成）



図-18 湖畔側の店舗立地（2015 年時点、筆者作成）

表-6 たて道の空間変容と集落の変容過程

	出来事・基盤整備	集落範囲・土地所有	生業の変化	たて道の利用	たて道の空間変容	現況
～江戸期	雪代被害 湖畔沿いにケヤキ（風除け） 屋敷・蔵の側にイチイ（火除け）	集落範囲を規定 寛文9年 38戸（3組）	農業 漁業 駄賃稼ぎ 養蚕	湖畔沿いの畑へ行く農道 湖畔沿いの舟へ行く道		雪代被害の記録 言伝え たて道沿いに ケヤキ・イチイ
明治	M35 中央線開通	M1 69戸（5組）	駄賃稼ぎの衰退		集落北側：鎌倉往還に面した 家屋・湖畔まで 一軒の細長い区割 集落南側：湖畔側畑地に利用	たて道沿道の 区割りの特徴
大正	T6 通電範囲の拡大 T9 37、38、25号村道指定	T6 124戸			集落南側：分地による屋敷地 の拡大	
昭和	S7 湖畔道路開通 S20 梨ヶ原に米軍駐留 S22 農地法 S26 雪代災害 →水路整備 →集落への雪代被害がなくなる S28 湖畔道路が二級国道指定 S34-37 湖畔道路舗装 S39 37号舗装整備 S40年代 39号拡幅 39、41、42、43号舗装整備 S44 中央自動車道、東名高速が開通 S49 44、18、39、40、41、42、 43号村道指定 25、44号舗装整備 S50 38号舗装整備 S50年代 湖畔駐車場整備 鎌倉往還ヘスカーールゾーン指定	戦後（7組） 米軍重機導入 ↓ S30年代 丸尾地区開発 S47 500戸程度 S53 丸尾組（8組）	養蚕業の衰退 トラックによる駄賃稼ぎ S20-S31 米軍向け飲食業の発展 （バチンコ・ピアホール） S31以降 貸寮の開始 S40年代 保養所の発展 →ドライビン店舗の展開 →住民が湖畔側へ店舗を出店 湖畔道路側の集落密度が増加	米軍向けの生業の展開 （風呂屋・床屋） →車両の抜け道	湖畔南側地域の土地が 農業を営む住民の所有に 英語看板などの設置 →家屋の建替 （セットバック・屋敷拡大） 保養所の庭の整備 塀の設置 集落南側：外資店舗の進出	店舗名に名残 （風呂屋・床屋） 現在の屋敷地と 道との関係 保養所経営時の 庭や塀が残る 集落南側の 外資店舗 南側平日朝 車両交通量多い
平成		H5 丸尾2組、二ノ橋2組、 一ノ橋（11組） H23 山中西組（12組） H25 600戸程度	保養所の減少			

5. 最後に

本研究により得られたたて道の空間変容と集落の変容過程に関する知見について表-6に示す。

本研究の成果と今後の課題は以下の通り。

(1) 本研究の成果

- ・ 山中地区の9本のたて道の沿道を含めた空間変容について、ヒアリングを中心に情報収集を行い、整理した。
- ・ たて道の空間変容に関する分析を通して、山中地区の集落構造の変容過程と、自然条件、集落の社会構造、生業の変化との関係について考察を行った。
- ・ 具体的には、雪代災害の履歴と旧集落範囲との関係性、イッケの分地による集落範囲の拡大と区画形状、土地所有状況の関係性、およびこれらの特徴が戦後の生業の変化においてもたらした影響について考察を行った。

(2) 今後の課題

- ・ イッケを主とする集落の社会構造と集落の拡大過程のより詳細な分析。
- ・ 集落構造との関係性からみた、各たて道の空間の多様性の記述。
- ・ 本研究のたて道の景観整備、山中地区、山中湖村のまちづくりへの展開。

謝辞：本研究において、山中湖村役場や山中地区の住民の方々には多大なるご協力をいただいた。厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 山村順次：富士山北東麓山中湖村における観光地域の形成と機能、千葉大学教育学部研究紀要、1989
- 2) 高橋朋子、福島秀哉、中井祐：山中湖村における湖畔景観の形成-土地所有形態と生業に着目して-、景観・デザイン研究講演集 No. 10, pp126-131, 2014
- 3) 山崎明日香、福島秀哉、中井祐：山中湖村山中地区における集落構造の変容過程-街路網と生業に着目して-、景観・デザイン研究講演集 No. 10, pp120-125, 2014
- 4) 富士急行50年史編纂委員会：富士山麓史、富士急行株式会社、1976
- 5) 山中湖村役場：山中湖村史、1992
- 6) 山中の歴史編纂委員会：山中村の歴史、2003
- 7) 不明：寛文九年水帳縄受図、1669、高村不二義氏所蔵
- 8) 山中湖村ホームページ：http://www.vill.yamanakako.lg.jp
- 9) 山中湖村役場：山中湖村史 第三巻、pp. 565-571 1992
- 10) ヒアリングNo. 9, B氏
- 11) 中野村：（災害復旧関係）昭和26年雪しろ災害、1951
- 12) ヒアリングNo. 9, B氏
- 13) 同上3)
- 14) 山中湖村役場：山中湖村史 第三巻、pp. 565-573, 1992
- 15) 山中湖村役場：山中湖村史 第三巻、pp. 816-823, 1992
- 16) 山中湖村役場：山中湖村史 第三巻、pp. 816-823, 1992
- 17) ヒアリングNo. 12, J氏
- 18) ヒアリングNo. 6, H氏
- 19) 同上3)
- 20) 山中湖村役場：山中湖村史 第四巻、pp. 120, 1992